

# Eureka IX

六年制通信 No.32 令和4年1月21日(金)号

## 温故知新

明治維新を経験した人々がもし現代に蘇ったら…。時々空想して楽しんでいます。勝海舟や西郷隆盛が現代の文明を目の当りにしたら一体どのような感想を持つのでしょうか。彼らのような有名な人だけでなくごく普通の人々にも聞いてみたいですね。刀を差して歩いたことのある人たちもいるわけだからね。何に一番驚きますかね。彼らはガスも水道も知りません。車も知らない。電車も見たことないですよ。飛行機ももちろん知らない。自動ドアも知らない。コンタクトレンズも知らない。電気がないので掃除機も炊飯器も洗濯機も冷蔵庫もラジオもテレビもエアコンも何も知りません。お月さんに人類が立つなど、考えもしなかったでしょう。静電気のビリッは知っていたのでしょうか。身に着ける素材や身の周りの品を考えると、静電気を感じた人はいなかったのかな。携帯電話なんか、何も言わずに渡したらどうしますかね。地面にたたきつけて壊しそうですね。こういう空想をしていると結構面白いですよ。

明治から150年余り、今や文明の発達もほとんど頂点に来ているような気がします。やがてドローンが上空を飛び回り、交通事故といえば地上で起こるのではなく空飛ぶ車同士がぶつかって落ちてくることを言うような世の中になるのかもしれない。この先の文明を見たいような見たくないような複雑な心境です。2045年問題でしたか、人工知能が人間の知性を越えると言われていていますね。だからどうなのか、私にはわかりませんし、そんなに興味もないのですが、そのころ君たちは間違いなく社会の中心となる年齢に達しますね。楽しみですか、それとも怖いですか。

しかし、どれほど文明が発達しようと私たちの精神のありようは、過去から現在へと「進化」しているわけではありません。このあたり、皆さんは誤解してはいけません。例えばスマホでも映画のCGでも、私たちは昔の人には考えもつかない技術を手に入れています。しかし、だからと言って、私たちは昔の人より「優れている」と勘違いしてはいけません。便利を追求するのは人間の本来ですから、文明の利器は放っておいても進歩します。しかし、人間の精神は進歩していません。むしろ退化しているようにさえ思います。傲慢になっているようにも思います。便利さには人を墮落させる一面があるからです。現代人はほんの少しの不便にも我慢ができなくなったではないですか。肉体的には弱く、精神的には脆くなっていますよね。ありとあらゆる苦しみを全部自分以外のせいにしていませんか。今の若者の方が病んでいるように思えます。

現代の風潮は、今を生きる人間こそが最も優れているという勘違いを助長しているように思えます。私はこれまで勉強を続けてきて、むしろ昔の人の方が何倍も立派だ

ったと思っています。語学の話になりますが、私はたった一人で和英大辞典を作った英語の天才をはじめ、昔の語学の天才たちの物語をたくさん知っています。その人たちの多くは明治や大正のお生まれです。漱石や露伴などは明治になる直前に生まれています。彼らが18歳の時に読んでいた英語の本は今の私には難しくて読めません。一体どんな勉強をすればああいう人たちのようになれるのか、想像すらできないのです。私は若いころから昔の人の勉強に、その質量ともに驚嘆し続けてきたので、現代の方が昔の人より賢くなっているなどと一瞬たりとも思ったことがないのです。逆は何度も思いましたけどね。私たちはもっと謙虚に勉強する必要がありますね、きっと。

そういえば先日あるテレビ番組で、「17世紀から18世紀にかけて製造されたバイオリンの名器ストラディバリウスを越えるものは現代の技術でも作ることができない」と言っていました。音楽の世界には現代人の越えることのできない技術があるようで、ちょっと嬉しかったです。他にもそういう世界はあるのでしょうか、誰か教えて。

論語には「温故知新」という言葉があります。いつも言いますが、二千五百年以上前の知恵を私たちは今なお学んでいます、繰り返しね。これは「故(ふる)きを温(たつ)ねて新しきを知らば、以て師と為るべし」から来ているのですが、我が愛用の『ポケット論語』では「古い昔のことを研究して、その中から新しい価値や意味を発見し、それを現代に生かすことができる人なら、人の師となることができる」という解釈です。私は「古い昔の人の言葉に耳を傾けたり、著作を読んだりすれば、必ず新しい発見がある」と解釈しています。君たちも頑張って故きを温ねてごらん。

### 今週のおすすめ

・知念実希人 『ひとつむぎの手』 (新潮文庫)

『仮面病棟』以来、この人の本を何冊か読みました。『ひとつむぎの手』の主人公は大学病院で心臓外科医として働く平良祐介。教授から三人の研修医の指導を任せられます。そのうち二人が入局を希望すれば平良自身にも一流の系列病院への出向の道が…。この本はほとんどミステリーの要素はありません。ただ、平良さんに感化されていく研修医たちの姿が私は好きでした。師匠と弟子が信頼関係を築いていく姿が私は好きなのですね、きっと。

主人公の変わらない短編集、いわゆる連作短編集も大好きなのですが『祈りのカルテ』(角川文庫)は面白かったですね。この主人公はほかの作品にも登場します。研修医として精神科、小児科、循環器内科などで医師としての経験を積むわけですが一つの科で一話完結です。作者は医師ですから医療現場のリアル感が伝わってきます。

『崩れる脳を抱きしめて』(実業之日本社文庫)もよかったよ。ご本人が「自分にしか書けない恋愛小説」と自信を示していますが、ラストのどんでん返しを私は見破ったのでした。すごいでしょ。ただ、主人公が大学でやっていた部活動まではわかりませんでした。そう来たか、という感じでした。気になる人は是非読んでごらん。

『十字架のカルテ』は犯罪者の精神鑑定を行う医師の物語。これ、ドラマにすれば面白いだろうなあ。君たちも自分で配役を考えたりして楽しめるんじゃないかな。

BGMは 尾崎豊 の 太陽の破片 でした…。